

組版を愛するすべての人に贈る 組版基礎学習マガジン

# たのしい組版

EXCITING TYPE

## 約物ってなんだ!?

役割から考える禁則

調整の方法

行に端数が生じる要因

調整の必要性を考察する

# いくぜ!

# KINSOKU BUSTERS

いよいよ禁則処理に挑みます!

# VOL.5

THE HEROES OF A SHADOW

80 約物ってナンだ!?

Roles and Rules

役割から考える禁則

82

THE METHODS OF CONTROL

調整の方法

88

THE SCENES I WANT YOU TO CONTROL

行に端数が生じる要因



84

what did we get?

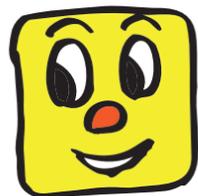
調整の必要性を考察する

90

# KINSOKU BUSTERS

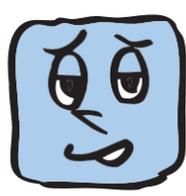
キンソクバスターズ (キャラクター紹介)

活字のカッチャン



次代の活字界を担う若きエースで、みんなの人気者。マイペースでのんびり屋だが、そのなごやかなムードに人々は魅了される。

約物のヤクケン



カッチャンをライバル視する約物界のプリンス。カッチャンにジェラシーを感じていて、イジワルモするけど、根はいい奴。

禁則オバケのキンソク

アカンやろ!



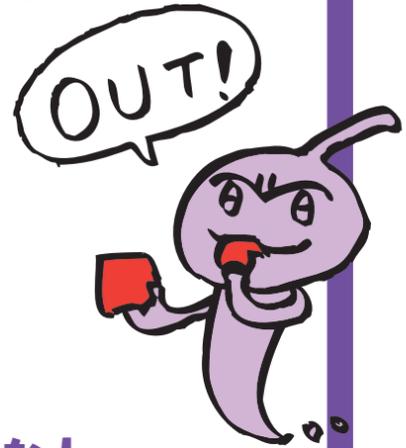
正しく禁則処理がされなかった文字たちの怨念が実体化したもの。几帳面な性格で、口癖は「アカンやろ!」。

# Introduction イントロダクション

## 禁則処理とは

「行頭に置いてはいけない」などの特別なルール(禁則)を持った文字や記号を正しく記載するために、文字の組み方を調整することです。

から始まる物語



「特別なルール」という時点で、「なんだか難しそう」と尻込みされてしまうかもしれませんが、例えば、このようなルールを持った記号の中で、多くの方になじみ深いものとして句点(。)や読点(、)があります。

これらの記号は、もともとの日本語の表記にはなかったもので、本格的に取り入れられたのは、昭和20年代('45~'54)のことです。

もともと句読点は、文字の扱い方や文体が変化する中で、「文を読みやすく、分かりやすくしたい」という配慮から生まれたものでした。つまり、これは文章を手掛ける人から、読む人に対する「おもてなし」の心が生んだルールだったのです。

おもてなし



一方、現代ではこれらの記号にまつわるルールは、組版の分野においては、コンピューターの登場によって、「設定さえ合っていれば、あとは機械が自動的にやってくれるもの」というような認識に変わってきているようにも感じられます。結果として、これらのルールに対しては「手っ取り早く効率的に」というような、効率重視の考えになりがちです。

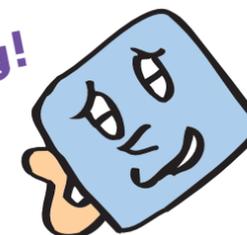
しかし、こういったルールが本来持っているはずの意義や役割を理解したうえで、効率的な仕事の進め方を考えるのと、そうでないのでは、制作物の品質に差が出ることは間違いありません。

これまでに本誌が取り上げてきた各種の学習内容と同様に、今一度「禁則処理」についても、

「どうしてそうするのか」  
「どういう役割を果たしているのか」

ということを知ることによって、文字を扱う仕事に対して、さらなる意義を見出すことができ、もっと楽しく係わることができるはずです。

Take it easy!



# History

句読点の歴史

江戸時代

ごく一部ではあったが、木版の印刷物で句読点が使われ始める。

明治~大正

公用文をはじめ、新聞などでも句読点は使用されておらず、むしろ「そんなものを必要とする文章は悪文である」という風潮があった。

昭和

昭和21年('46)に国が「くぎり符合の用い方」を公布。その後、昭和25年('50)以降に新聞各紙で句読点が採用されるようになる。

句読点が一般化した理由

文章の表現が文語から口語(現代文)に移行し、句点がなければ連体形・終止形の区別ができなくなったため。

文語: 連体形「する」「なる」  
終止形「す」「なり」

口語: 連体形・終止形ともに「する」「なる」

# THE HEROES OF A SHADOW

文を記述する際に用いられる記号の中には、「行頭に置いてはいけない」など、特別なルールが約束されているものがあります。これらの記号は「約物（やくもの）」と言って、かつては印刷用語で「締めくるもの」という意味があったようです。

記号の中でも「※○△□」などのように、特別なルールがないものを「印物（しるしもの）」と言いますが、これらの記号も含めて「約物」とすることもあります。

約物ってナンだ!?

## PARTITION!

前述したように、多くの約物は文字の成立と同時に生まれたわけではなく、文字や文体が変化していく過程で、必要に応じて増えていきました。約物の一つひとつに意味があり、それぞれが文中で文や単語を「区切る」「くる」「繋ぐ」「省略する」といった役割を果たしています。それぞれの役割や特徴について見ていきましょう。



## 主な区切る約物

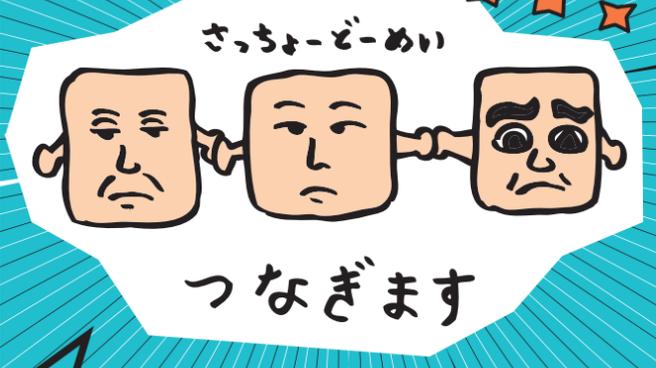
文節や単語間で区切る役割を果たします。ここに挙げた約物の中で、疑問符(?)と感嘆符(!)以外の約物は、1字分の幅(縦組みでは高さ)がなく、前や後ろに余白をとって1字分とします(詳細は本誌1号のP8-9『組版におけるアキの意味を考える』を参照)。

それぞれの区切りの強度には差があって、例えば、句点と呼ばれるマル(。)やピリオド(・)は、いずれも一つの文の終わりに入れるものです。よって、この中では、一番区切りの強度が強い約物と言えます。

さらに、句点以上の強度で区切りを付けたいという場合には、約物を入れて文を続けるのではなく、次の行へと改行し、新しい段落を作ることになります。つまり、区切る役割を持った約物は、改行・改ページ・章などの「大きい区切り」に対しては、「最小単位の区切り」と捉えることができるわけです。

マルやピリオドとは逆に、この中で区切りの強度が最も弱いのは、中黒(・)です。例えば、中黒は「リズム・アンド・ブルース」というように、外来語をカタカナで表記した場合にも使われます。この場合は単語間を区切る役割だけでなく、繋ぐ役割も兼ねていることになるため、句読点などに比べると、区切りの強度が弱いことになります。

## JOINT!



## 主な繋ぐ約物

前後の文や単語を繋ぐ役割を持っています。「区切る約物」の中で紹介した中黒とは異なり、区切る性質は弱いので、いずれも全角の幅(縦組みでは高さ)となっています。ここに挙げたダッシュ(—)と3点リーダー(…)は、文や単語を省略する際に使用されることもあり、「……」というように、2字分が使われることが多いという共通点もあります。



## 主な省略する約物

繰り返し点(ゝゝ々)は、直前の文字の「繰り返し」を意味する記号、その他のものは特定の単語を省略した記号です。繰り返し点に関しては、書き文字の風習を踏襲したもので、他の約物に比べると、特筆すべき効用がありません。それ以外の省略記号は、「文字数の減少」「簡略化」などの効用があります。

## 主なくくる約物

「かっこ類」と呼ばれるもので、ほとんどの場合、二つで対という扱いをします。文中で、くりたいもの前後に入ると、くられたものが、文中で独立した扱いになります。

始まりに入れるものを「起こし」、終わりに入れるものを「受け」と言い、これらを単独の約物として捉えた場合には、前後の文字に対して、区切る役割を持っていることになります。

そのため、それぞれの約物は、句読点などの区切る約物と同様に、半角分の幅(縦組みでは高さ)となっており、前後の余白を含めて1字分とします。

かっこ類もそれぞれの区切りの強度に差があります。出版社や書籍ごとに扱いが異なる場合が多いので、一概には言えませんが、一般的には、かぎかっこ(「」)やダブルミニユート(“”もしくは“”)は、会話文や強調したい語句に使われることが多く、区切りの強度が強い傾向にあります。

一方、かっこ(())や山がた(<>)などは、本文に付随する、補足的な内容を記述する際に用いられることが多いため、他のかっこ類に比べると、区切りの強度が弱い傾向にあると言えます。

約物の分類のしかたには様々なものがありますが、分かりやすさを重視しつつ、本誌独自の分類をしてみました。こうして、一つひとつの役割を見てみると、普段になげなく使っている約物の意味合いは非常に大きいものであることが分かります。

これらの約物の役割を総括すると、その主要な目的は、「文の内容・構造を視覚的に分かりやすくし、読解を補助すること」です。しかし、これらを文中のどこに置かによっては、逆に文章を読む上で無意味な「引っ掛かり」になってしまうことが考えられます。

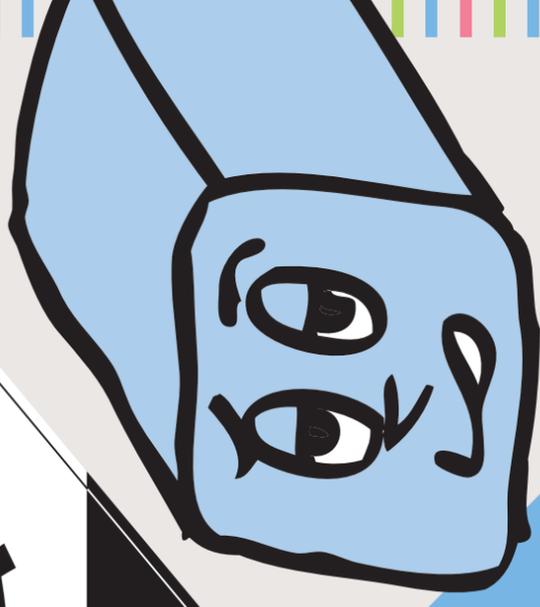
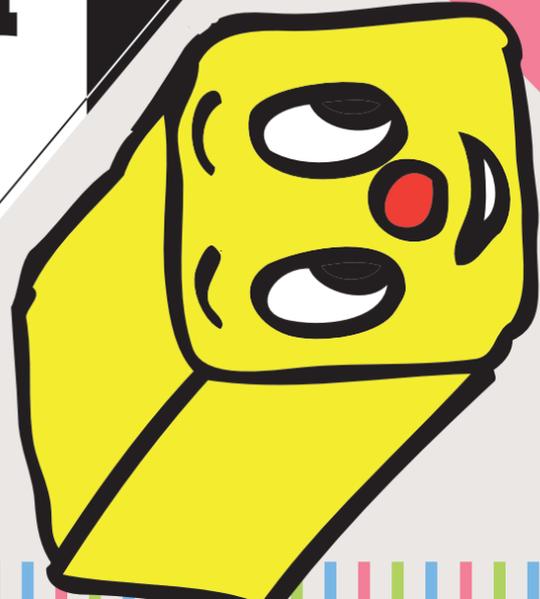
そこで必要になるのが、次項で詳しく紹介する「禁則」というルールです。

TO BE CONTINUED



# 調整の方法

禁則処理などによって、行に端数が生じる場合  
 (1行の字詰めが本文のQ数で割り切れない状態)には、  
 字詰め調整が必要となります。  
 調整方法には、  
 「追い出し」と「追い込み」  
 の二つの方法があります。



どちらの調整方法も一長一短がありますが、いずれも「複数の行頭・行末を揃えて見せる」「可読性を保つ」という趣旨に基づく処理です。よって、処理にあたっては、調整した行を「目立たせない」ことが大前提となります。

かつての組版においては、どちらかの処理方法しかできない時代もありましたが、現在のDTPの編集ソフトでは、二つの方法を併用することも可能（しかも、コンピューターが自動で行ってくれる）です。状況に応じて調整が目立たない処理方法を選択することが可能なので、調整に関しては、より美しい組版が可能な環境と言えらるのではないのでしょうか。

コンピューターが自動で処理してくれるにしても、その設定をするのは、結局は人の手によるものです。また、例え設定を完璧にしたとしても、すべてコンピューター任せとはいかないところもあります。今一度これらの調整方法の注意点について見てみましょう。

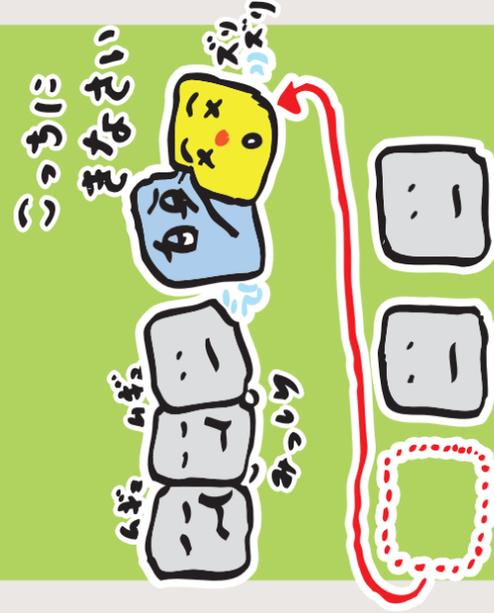
## 追い出し

- 端数を調整する際に、行末の文字を次行の行頭へ送る
- 追い出しをした行は「字間が空く」



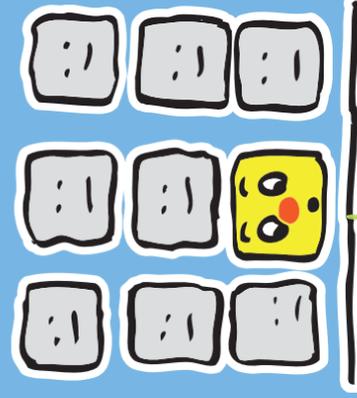
## 追い込み

- 端数を調整する際に、次行から行末に文字を持つてくる
- 追い込みをした行は「約物の前後のアキや字間が詰まる」
- 文字間を詰める追い込みは、写植が作られ、活字のボディが仮想のものとなったことにより、編み出された調整方法



## ぶら下げ組み

「追い出し」や「追い込み」とセットで覚えておきたいものとして、「ぶら下げ組み」があります。これも行の調整に係わるもので、行頭に配置される句読点を前の行末の後に、はみ出させて組むものです。かつては、縦組みにのみ適用できる組み方だったようですが、現在では横組みでのぶら下げ組みも一般的となっています。句読点以外の約物には適用されませんが、ぶら下げ組みをすることによって、行の調整箇所を減少させることのできるという利点があります。



## 追い出しの注意点

文字・約物の組み合わせによっては、必ず「ベタ組み」にしなければならぬものもあります。追い出しをする際には、調整をした行の中で、これらの文字・約物の間が空いてしまう可能性があるため注意が必要です。空いてはいけぬ文字・約物の組み合わせには、次のようなものが挙げられます。

①**半角約物で前後の文字とベタ組みにしなければならぬもの**

例) ■。(文字+句読点) × ■。  
 「■(起こしのかっこ類+文字) × 「■  
 ■」(文字+受けのかっこ類) × ■」

②**前後をベタ組みにすべき半角約物が連続しているもの**

例) 』。(句読点+受けのかっこ類) × 』。  
 』。(受けのかっこ類+句読点) × 』。  
 『(起こしのかっこ類が連続したもの) × 『  
 』(受けのかっこ類が連続したもの) × 』』

③**分離禁止に該当する繋ぐ約物を2字分で使用したもの**

例) ——(2字分のダッシュ) × ——  
 ……(2字分の3点リーダー) × ……

④**連数字(アラビア数字・半角もの)の間**

例) 0123456789 × 012

⑤**アルファベットで記述した単語の中のアルファベット間**

例) Type × Type

①②は、それぞれ区切る役割を果たす約物なので、区切る方に対して、反対側の文字とは必ずベタ組みにします。これは、空けるべきではない箇所を空けることによって、区切るために入れたはずの、

約物の前後のスキの意味が弱くなってしまふことを防ぐためです。

それでは②とは逆に、「句読点+起こしのかっこ類」受けのかっこ類+起こしのかっこ類」というような組み合わせはどうするのかというと、これらの組み合わせは、調整の有無に係わらず、

□□□、「□□□」(□□□)。(□□□)

このように約物間を半角空けるのが基本となります。③は『役割から考える禁則』(P82-83)でも、ご紹介したように、2字分で使用した場合には、二つで1字分という扱いになるため、間隔を空けることができませぬ。

④⑤は、日本語の活字と性質が異なるため、アラビア数字・アルファベットの間をベタ組みにします。特に⑤のアルファベットは、日本語と記述のしかたが異なっており、分かち書き(単語間にスペースを入れて記述する方法)を基本とするため、文字の間に不要なスキを入れることによって、読みづらくなるおそれがあります。



### 【すべての方法に共通する注意点】

どの調整方法においても、段落先頭の1字下げの部分を読めたり、空けたりしてはいけません。必ず本文Q数の全角スキを保つようにします。

## 追い込みの注意点

文字の追い込み方を大別すると、「文字間のベタ組みを優先→約物の前後を読める」「約物の前後のスキを優先→文字の間を読める」という二つの方法が考えられます。

様々な細版の資料を見ていくと、「文字の間のアキは読めるべきではない」「約物のアキは維持すべき」と、様々な意見が錯綜しているのが現状です。

しかし、一つの印刷物の中で、文字種のバリエーション・約物の使用頻度が多ければ多いほど、「文字間のベタ組み」「約物の前後のスキ」の両立は、不可能になると言ってもいいでしょう。両方のアキを保つのであれば、調整方法を「追い出し」にすべきなので、これより先は調整方法を「追い込み」と前提した場合の注意点を挙げます。

### 【追い込み際の注意点(共通事項)】

①**句点・ピリオドの後ろは読めない**

例) ■。(句点+文字) × ■。

今回の取材に使用した資料では、新旧を問わず、ほぼすべてのものが、「句点・ピリオドの後ろのアキは読めない」としていました。やはり、句点・ピリオドは区切る約物の中で、もっとも区切りの強度が強いものなので、どんな場合でも読めるべきではないということなのではないでしょうか。

### 【約物を読めて追い込み際の注意点】

①**約物の優先順位を決めて読める**

②**前後にアキがある約物を読める場合は均等に読める**

例) ■・■ × ■・■

③**かっこ類の前後のアキを読める場合は均等に読める**

例) ■「■」■ × ■「■」■

①は、それぞれの半角約物の区切りの強度を基準に優先順位を決めます。区切りの強度が強い約物(・「」"”ミ、など)のアキを極力保ち、区切りの強度が弱い約物(・( ) < > など)を優先的に読めていきます。

ただし、前述したように約物の扱い方は出版社や書籍ごとに異なる場合があるので、断定的に優先順位を決めることができませぬ。特に約物の種類が豊富な使われているような特殊な内容のものや、新規のクライアントとの仕事においては、事前に打ち合わせをし、約物の扱い方を明確にするようにしましょう。

②③は、約物の役割という観点だけでなく、見た目から言っても均等に読めるべきです。

### 【文字間を読めて追い込み際の注意点】

①**文字同士がくっついてしまふほど読めてはいけない**

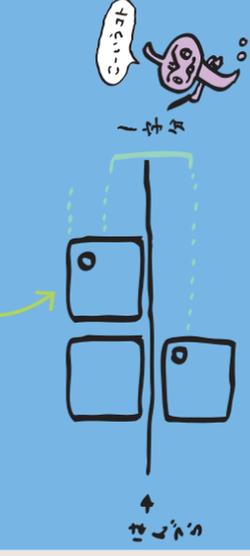
②**かなの多い行を優先的に読める**

①は、大前提とも言えるもので、文字同士がくっついてしまふくらいなら、「追い出し」にして文字間がばらけてしまふ方が、見やすいでしょう。

②は、本誌3号(『和文書体の基礎知識・スタイル』P38)でもご紹介した内容に基づきます。漢字に比べると、かなの文字は余白が多いので、読めることが可能なアキも多いためです。

なお、ぶら下げ組みをする場合には、特定の箇所のみ適用するのではなく、一つの印刷物を通してぶら下げ組みにするのがルールです。

ぶら下げ組みの句読点は、本来の版面よりも半分はみだして配置されることとなりますが、この際に、その他の行で行末に配置された半角約物(句読点や受けのかっこ類)が全角扱いで配置された場合には、ぶら下げた句読点と1字分の差が生じるようになります。



絶対的なルールというわけではありませぬが、「揃える」という観点からすると、このような版面の凹凸を防ぐために、「ぶら下げ組みをする場合には、行末の句読点を半角にするべきではないか」という声もあります。

また、ぶら下げ組みには、

「**行末に配置された句読点は、すべて強制的にぶら下げる**」

「**行内に収まるものはぶら下げない**」

という二つの組み方があり、強制的にぶら下げ組みでは、本来は行内に収まるはずの句読点もぶら下げとなります。この時には、追い出しと同じように、対象となる行の字間が空くこととなります。



## 調整に関するまとめ

様々な調整方法についてご紹介しましたが、いずれの調整方法も行長などの版面の設計とも深く係わっています。というのも、行長が長いことは、1行の字数が多いということであり、字数が多ければ調整に使える箇所も多いからです(例えば、半角約物がない状態でも、12Qの1字分を追い込む場合に、1Hずつ詰めるとすれば、詰めるところが12か所あればいいことになります)。

逆に行長が短ければ、調整に使える箇所が少なくなるわけですから、ほとんどの行が調整によってばらけてしまふということも考えられます。この場合には調整方法を考慮するだけでなく、禁則を緩めることも視野に入れないはならぬと言えましょう。つまり、禁則のすべてを厳格に守ることが必ずしも正しいとは限らないということです。

この他にも、2段組みや3段組みで、ぶら下げ組みを適用する場合には、段間がそれに耐えうるものかを見極める必要があるなど、様々なケースが考えられます。これらの調整に係わる設定は必ず版面の設計とセットで考える必要があるものです。

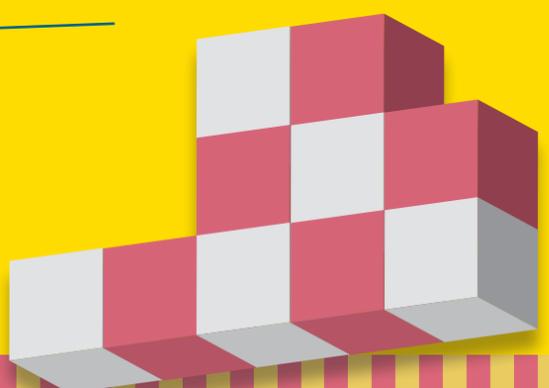
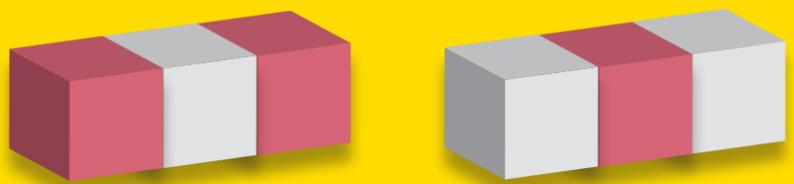
実際の調整する工程は、すべて機械的に自動処理するのが望ましいところですが、すべてを自動で行うことが現状では難しいかもしませぬ。また、今後すべてを自動で行うような、素晴らしいシステムが実現したとしても、クライアントからは「どこかで1行詰めて、収めてほしい」というような要望を受けることもあるでしょう。

組版をする上で、オペレーターは「自動で正しい調整がされる設定になっているか」ということにも、気を配る必要があるため、調整のためにどのような処理をしているかを理解することが重要です。



# what did we get?

調整の必要性を考察する



## 文字の作りが意味するもの

**謎** を解く鍵は、3号や4号で学習した書体の作り、言い換えると「文字」の作りにあります。3号では「可読性に優れた書体は、漢字とかなのサイズに差がある」ということを学習しました。これは、漢字とかなのコントラストによって、文中にある単語とその構成が掴みやすくなるからです。

こう考えると、そのコントラストがもっとも有効になるのは、活字の間隔を空けずに並べた状態、つまり「ベタ組み」が、日本語にとっては、もっとも可読性の高い組版と言えるわけです。

ベタ組みを維持しつつ、さらに複数の行頭と行末を揃える形を目指したことが、日本語の組版の複雑さに繋がっていますが、それと同時に、ここからは日本語の組版の素晴らしさも感じ取ることができないでしょうか。

## 様々な面において優れた日本語の構造

**複** 数の行頭と行末を揃えるということは、どちらかといえば可読性に係わる内容ではなく、見た目を美しくしたいということだと思われます（金属活字の時代においては、作業上の効率を考えて作られた形だということも想像できますが）。このような観点からすると、日本語の活字は正方形で統一されているので、やはり「揃える」という作業が非常にやりやすいものになっています。

なおかつ、複数の文字種（漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベット、アラビア数字）を扱うことによって、組む上では複雑さも増しますが、4号の『欧文書体の基礎知識・イタリック体』（P62）でも学習したように、他の言語に比べて、単語が視覚的に見分けやすくなっています。そして、複数の文字種があるおかげで、多少文字の間隔が変わっても、読めないことはありませんから、これも「揃える」作業がしやすい条件の一つと言って良いでしょう。

## 「揃える」意味を再考

**本** 誌1号の『組版におけるアキの意味を考える』（P8-9）では、「一つの枠の中できっちり揃える」というのが日本の組版らしい考え方だと述べました。これは、欧文の組版に見られるラグ組み（行頭のみを揃え、行末を揃えない組み方）と比較して感じたことを述べたものですが、これまでの学習で得た材料をもってすれば、さらに内容を深めることができます。

1号では、この他にも『活字の構造。』（P6-7）で、日本語の活字は、正方形のマスの中に収めるようになっていることを学習しました。これほど、一つの枠の中できっちり揃える組版に適した設計はないと言える構造です。それでは、なぜ揃える必要があるのでしょうか。



経験豊富な営業技術者がお客様の要望を力  
タチにしていくお手伝いをいたします。常に伝  
達を大切にし、出版計画や事業政策営業戦略に即  
した発想でお応えします。必要な技能を持つ人  
員を集めて制作班を編成し、印刷物の設計から、納  
品までの過程全般に関わり、高い品質と成果を生

## 素晴らしい日本の組版

**日** 本語の活字を作った方が、どこまで利便性を考えて作ったのかは分かりません。また、こういった技術は何気なく見ていると、特別なものを感じることもないでしょう（そういった「感じさせない」ところも、また、組版の本質とするところでもあるとは思いますが）。しかし、こうやって様々な要素を丁寧に分析していくと、日本の組版がめざした「機能美」のようなものが多分に感じられます。まさしく、古来からの日本の文化が詰まった、世界に誇れる財産の一つと言って良いでしょう。

これまでの学習を通じて、多くの「優れた先人の恩恵」を受けて、このような「素晴らしい技術」を使わせていただいているのだということがよく分かり、感慨深く感じます。

約物が一般化していない大正時代の組版を再現したもの。すべての字間を4分アキとし、句読点を字間に配置している。この組み方が現存していないことを考えると、現状の組版の形が日本語組版の完成系で、今後も変わることがないのではないだろうか

参考文献

- 『コールドタイプ和文組版技術教科書』（一色文臣/ '73）  
『組み NOW 〈写植ルールブック〉』（写研/ '75）  
『現代組版の基礎知識』（新井暢/ '81）  
『標準編集必携』（日本エディタースクール/ '87）  
『季刊 d/sign no.5』（太田出版/ '03）  
『季刊 d/sign no.6』（太田出版/ '04）  
『文字組版入門』（モリサワ/ '05）  
『DTP WORLD』（'08年5月号）  
『エディトリアル技術教本』（板谷成雄/ '08）  
『日本語組版の考え方』（向井裕一/ '08）  
『タイポグラフィの基本ルール』（大崎善治/ '10）  
『文字の組み方 組版／見てわかる新常識』（大熊肇/ '10）  
日本語組版処理の要件（Web）

企画・編集

アイワード プリプレス部



株式会社アイワード

<http://www.iword.co.jp>

本社 〒060-0033 札幌市中央区北3条東5丁目5番地91  
東京営業部 〒101-0065 東京都千代田区西神田2丁目4番3号 高岡ビル6階  
札幌工場 〒060-0033 札幌市中央区北3条東4丁目5番地64  
石狩工場 〒061-3241 石狩市新港西3丁目768番地4

TEL 011-241-9341 FAX 011-207-6178  
TEL 03-3239-3939 FAX 03-3239-3945  
TEL 011-251-0009  
TEL 0133-71-2777 FAX 0133-71-2895